

(伝説)

惟嵩親王伝説について

惟嵩親王と惟仁親王（清和天皇）

ここ強戸の地に北長岡（入長岡）という所があります。ここには御所の入り、愛宕、加茂川、西山、東山、天皇山などと京都の地名が付いているところが数多くあります。その昔よりここに住む周藤という苗字の一族が住んでいます。その周藤氏が惟嵩親王を守っていると伝えられていました。新田郡衙とう奈良時代の遺跡が確認されたこともありこの時代を調査してみました。

まず惟嵩親王のことですが、この方は第 55 代文徳天皇長男にあたり、母親は紀静子という紀家の方で大変天皇の寵愛を受けていた方であったようです。

その弟に惟仁親王が産まれます。母親は藤原明子という方で、当時大変権力を持っていた藤原良房という人の一人娘でありました。

娘が男の子を産んだので、家の繁栄、権力の集中を図るため自分の孫をどうしても天皇にしたいとなりました。

そのためには、長男の惟嵩親王を何とかしなければなりません。

産まれて 9 ヶ月の子を立太子にしてしまいました。

これには父親の文徳天皇も反対して何とか惟嵩親王を立太子にしたいと言ったようですが、周りのものからもあまり強引にすると殺されてしまうという進言を聞き諦めたようです。

惟嵩親王は 844 年生まれ、また惟仁親王は 850 年生まれ。6 歳年上です。

858 年（天安 2 年）には惟仁親王は 9 歳で即位をし、清和天皇となります。

父親の文徳天皇在位は 850 年から 858 年の 8 年で亡くなってしまいます 31 歳。当然暗殺説も出たようです。この藤原良房という人が文徳天皇をも作っていません。

850 年に藤原良房に推される形で仁明天皇を譲位させ即位させています。

しかしその後は仲が悪く文徳天皇は、一度も内裏の正殿で生活することはなく、惟嵩親王の立太子（皇太子。次の天皇）を条件に惟仁親王に譲位をすると計画をしていましたが、惟嵩親王の身が危ないとの源信の進言で取りやめた経緯があることからしても、思いの隔たりは大変あったのが想像できます。

その後の惟嵩親王の動きですが 858 年清和天皇の即位の前に

惟嵩親王履歴

844 年承和 11 年 1 月 25 日生まれ

857 年天安元年 1 月 25 日 14 歳で帯剣。

天安元年 12 月 1 日元服をして四品の位、

858 年天安 2 年 10 月 25 日大宰権師（副長官）

863 年貞観 5 年 2 月 10 日、弾正尹

864 年貞観 6 年 1 月 16 日、常陸太守
(8 年間)

872 年貞観 14 年 2 月 29 日 上野太守

872 年病気のため出家 28 歳

(この年藤原良房死去)

897 年 54 歳で死去とある。

清和天皇履歴

842 年承和の変。藤原他氏排斥始まり

850 年 5 月 10 日生まれ

858 年天安 2 年 11 月 7 日即位

864 貞観 6 年良房摂政任命

866 貞観 8 年応天門事件

876 貞観 18 年突然譲位 27 歳

879 元慶 3 年 5 月出家

879 元慶 3 年 10 月畿内巡行

880 元慶 4 年 3 月丹波、絶食

881 元慶 4 年死亡 31 歳

また、周藤家にある古文書にはこのように記されている。

天安の頃、惟嵩親王御位争いにて 8 人の宮と関東に移され給う。そのうち、長岡の宮は 6 歳にならせ給うを上野の国に長岡と云って東西に丘が連なっている所ありて、その中間に都の長岡に似たところあり、清和の帝よりこの宮をここへ隠せと慈悲ありて、安元これを預かり奉りて都より下ってきた。そうして安元は宮を守護してそこを領知した。この安元という者は時重の 4 男で、周防の国、関という所に居たが召し上げられ、宮に付き給う。宮 14 年の後、御隠れ有て、天王と都より送り号をもらった。これにより安元は勅使のお迎えにまかり出て新たに仮屋を建て、お待ちを請い綸旨を頂戴した。その時より其処を天王山と言うようになった。安元の長男元親の子周籐三郎元氏という者、都へ上り、多田満仲（源満仲）に使えた。元氏は後に改めて藤原と名乗った。長岡の中に乞食端というところがあって宮の御前とも知らず、青梅を食べた。宮がご覧になって津をお引きになられた。にくき奴である。周籐駒の蹄をかけて罰せよと仰せになり、安元はこの乞食を殺して首をはね、埋めた。それより

乞食端という。これにより長岡の地に、入ることが出来なくなった。御所山という所は、宮を葬り奉るところなり。下に平らな土地があるが道修山と言う。宮の御乳母が一生懸命、一心不乱に菩提を弔っているので、其処を道修山と呼んでいる。そのほか、宮が世に在ること後の世まで末代まで濁して今に至るまで言い伝えて人の噂になっている。御所屋敷の前に流水がある。1町くらいの内であるが蛭という虫が居ない。これは其処に御所があるから嫌っているのだと言い伝える成。

惟嵩親王は6歳で送られてきた。とあるがこれは清和天皇が産まれた年14後で居なくなったとしているのは、良房が摂政になり、親王常陸の太守になった年となる。通常、天皇家の人々は位が与えられても地方に赴任することはないというのが通常である。

通常考えられるのは、惟仁親王が産まれたとき850年であるから惟嵩親王6歳のときに身の危険を察知して関東に来られたというのは考えられる。

その頃ここに住んでいたことは考えられる。8年間はいたことになる。

14の年に元服をして大宰府に執行とあるのはもう位が違うことを、周辺に認知左遷固めと考えられる。

20歳のときに良房が摂政となり最大権力を持ったことになるので、一番遠い田舎である常陸の国に行かされたと思う。

8年間を其処で過ごし、上野の国の太守として赴任をするが、その年に良房が死ぬ。そのためより身の危険を感じた惟嵩親王は出家の道を選ぶ。28歳のときである。

清和帝はずっと惟嵩に悪いなと思っていたようで、4年間は位にいて惟嵩の身を守ったとも、自分の子供の天王譲位安定と見守ったとも考えられるが、良房やその子供に権力志向やじぶんすら身の危険を感じたのかもしれない。殺される前に自ら位を退き出家の道に近い状態となったようだ。断食という苦行とあるが、意思を持って自ら命を短くしたことはあり得る。

その後の惟嵩親王は詩歌や、轆轤技術の普及に生涯を尽くしている。現在でもインターネットで惟嵩親王を引くと驚くほど出てくるのは、なぜなのだろう。

日本人の判官ひいきはわかるが、趣味や実技の世界で名を残した惟嵩親王、血筋でその後の日本史に燦然と輝く子孫を残した惟仁親王、どちらも藤原氏栄華の中で翻弄された兄弟のようだ。

その後の惟嵩親王を調べてみる。病のためとの理由により出家されて、都に戻っています。出家される前に住んでいたのは、もともとは大炊御門の南で烏丸小路の西ということです。出家後は比叡山の山麓の小野という所に隠棲をして

います。

その後、山崎の水無瀬に閑居。京都の雲林院の傍らにしばらく新居を構えて住む。その後江州 小椋の庄へ移り、轆轤を開発。また都に戻り大原、雲が畑、二の瀬、小野の郷 大森と隠栖と移って亡くなりました。素覚浄念と号された

源満仲（多田満仲）

この周藤家に記されている古文書の中で、周藤三郎元氏が都に上り奉公したとされる多田満仲という人物は実在の人物で源満仲で清和天皇のひ孫にあたり子供の貞純親王の子の経基の子で 936 年頃に頭角を現してきた人物である。（平将門の乱）

940 年に平将門の子探索で頭角を現す。摂関藤原家に使え多くの官職に着き莫大な富を築く。よって仕官をしたのは惟嵩親王没後 40 年くらい経ってのことか

文化財では当時の天皇家や公家などは、官位をもらっても都で生活をして、現地に赴任はしないのが流儀であったと考えるとの見解。

命の危険があった場合は実際どうであったかというのが確認がされないのが論点であるので現在でも伝説ということとなっている